

去る3月2日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所において、2022年度イスラーム信頼学全体集会が開催された。全体集会では、現代のパレスチナ・ドイツ・新疆ウイグル・100年前の欧米・シリアを事例に、今回の全体テーマである対立や紛争の現場において、人々がどのような関係構築・信頼構築を試みてきたのかということについて4名の登壇者から報告があった。また、報告の後に設けられた総合討論では文化人類学者の辻信一氏による、「あいだ」という概念やそれが有する／内包する認識とは何かという問題提起・問いかけをもとに、全体で議論が深められた。

報告文執筆者（以下、執筆者）自身、信頼学の鍵概念となる「信頼」や「コネクティビティ」を研究者（分析者・観察者）側が導出・析出しようとする際に、そこで主語になるものは何なのかということについて、かねてから疑問を抱いてきた。すなわち、そこで主語になるものは果たしてイスラームという教義なのか、それとも思想や戦略を紡ぐ主体なのか、ということである。イスラームにはコネクティビティがある、つなぐ力があるという前提に立った上での議論を行なってしまうと、この点が蔑ろにされがちであるようにも思える。つなぐ主体がムスリムだからと言って、結果的にそうした主体が紡いだ思想や戦略は果たして「イスラーム的」コネクティビティと呼べるのかどうか、ということについては、慎重な判断・評価が必要になってくると思われる<sup>1</sup>。

今回の各報告では、動態的な政治・社会的文脈の中で「他者」との関係を織りなす各地域／時代の主体に焦点をあてた報告が続き、上記の点について執筆者自身も思考を深める機会となった。それと同時に、「信頼」や「コネクティビティ」という概念は、信頼学に関わる研究者の様々な専門領域を「つなぐ」紐帯となっているが、あるいはそれゆえに、各々が用いる「信頼」や「コネクティビティ」という言葉の意味合いには多少なりとも隔たりがあるようにも感じられた。この点について、「あいだ」とは何か／どこかということをはじめとする総合討論での辻氏による根本的な問いかけを受け、学術変革領域「イスラーム信頼学」の共通認識として、これらの概念の内実や、その概念にこだわることによって何を捉えようとするのかということについても、改めて思考する契機となったに違いない。

\*

さて、今回執筆者自身も、「現代エジプトのサラフィー主義者による過激主義批判：信頼構築の試みと限界」というタイトルでポスター発表の機会をいただいた。ふだん「信頼」や「コネクティビティ」という概念に特段こだわることなく、現代エジプトにおけるサラフィー主義者

---

<sup>1</sup> この点に関して、シリーズ「イスラームからつなぐ」第1巻『イスラーム信頼学へのいざない』（東京大学出版会、2023年）では次のような記述がある。「[...] イスラームの教義から出発して演繹的考察を深め、イスラーム文明の独自性を結晶化させる、という方法はとらない。逆に研究者が取り組んできた過去と現在のイスラームをめぐる多様な時空間から、学知のみならず、暗黙知として認識してきたような『つながりづくり』の知恵と術を抽出 [...] それを排除と分断を乗り越えるための戦略知として鍛え上げる [...]」[黒木 2023: ii]。

の思想と活動を研究している執筆者にとって、報告を準備する際に、こうした概念にこだわることの意義や優位性、またこだわることによって何が見えるようになるのか、ということについて必然的に考えざるを得なかった。結果として、執筆者の研究対象であるエジプト・アレキサンドリアを中心に発展してきたサラフィー主義組織ダアワ・サラフィーヤ（以下、DS）が、彼らの生存戦略として、いかに台頭する過激主義（ジハード主義／サラフィー・ジハード主義）との差異化を行いながら「信頼」構築（誰にたいして／どのように）を試みてきたのかという文脈に沿って、これまでの研究成果を整理しポスター化することとした。

DSのような、ジハード主義・タクフィール主義を批判してきたサラフィー主義者らにとって、2011年の「アラブの春」以降にみられたISのような過激主義勢力の伸張は、自らの組織的アイデンティティをいかに表象しなおすかという課題を彼らに突きつけたように思われる。なぜなら、過激主義者からは「穏健すぎる」という批難を向けられ、また体制や治安機関からは、サラフィー主義は過激主義の潜在的な温床であり「過激すぎる」とみなされ、ときに安全保障化の対象にもされかねないという、いわば板挟み状態に彼らを陥らせてきたからである。また、2011年の「アラブの春」以降の政治過程において、従来掲げてきた議会政治に参加しないという姿勢を「逸脱」し政党ヌール党（以下、NP）を設立して政治参加したことも、DSに組織的アイデンティティの再表象を強いさせたと言えよう。

上記のような時局では、彼らの「信頼」構築のベクトルは、政治権力（体制）・市民・信奉者など複数の方向に向けられた。また、あるひとつの側面のベクトルにのみ「信頼」構築を試みれば、他方からは「猜疑」の目を向けられかねないという状況でもあった。こうしたなか、彼らがいかに理念と現実との狭間で生存戦略を定めてきたかをポスター発表では論じた。

いま振り返ってみると、「信頼」や「コネクティビティ」という視点から整理を試みることは、DSのイデオログやNP関係者らの著作および彼らの言動は、誰に向けられたものなのか、またその意図とは何かという点を、改めて執筆者に強く意識させてくれたように思われる。引き続き執筆者自身も、今回得た気づきをもとに探究を重ねたい。

#### 引用文献一覧：

- 黒木英充. 2023. 「シリーズ刊行によせて」黒木英充・後藤絵美 編『イスラーム信頼学へのいざない』（シリーズ「イスラームからつなぐ」第1巻）東京大学出版会, pp. i-ii.